

社会福祉実習における評価について —「実習受入先の評価」と「学生の自己評価」の比較分析を通して—

池田雅子
米本秀仁

1. はじめに

社会福祉実習とは教育・学習過程で学んだ理論知や醸成された問題意識を実践現場において一定の指導の下で仮構的に試行することにより、将来の実践家としての資質を向上させる場である。以前から福祉教育において重要な位置づけをされてきた実習は、1987年に「社会福祉士」の国家資格制度が成立したことにより、受験資格要件の履修すべき指定科目の一つとしての「社会福祉援助技術現場実習」という明確な位置付けが与えられた。その結果、従来以上に「福祉実践の後継者養成」という色彩が強まり、同時にその取り組み方が問い直されることになった。

全社協から出された『社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル』には、実習施設・機関における実習の達成目標やプログラムの組み方などの具体的な実習指導方法が「参考」として提示されている⁽¹⁾。このような流れに対する実習受入施設・機関の反応は、当初、戸惑いや拒否感などが大きかった。しかし資格制度成立後三年を経過した現在、施設・機関の理解も徐々に得られ、実習教育・指導において大学と協同しようとの機運も生まれ始めている。1990年3月の「社会福祉実習あり方研究会」で提起された内容は、具体的実習内容やスーパービジョンの方法、さらに実習教育の条件整備や受入施設・機関との共同指導体制の確立に向けてなど、実習教育充実のための具体的な諸課題である。

その中で「実習評価」は、社会福祉実習教育・指導の達成目標（水準）に照らして、その達成状況を測定するという機能を有する。言い換えれば実習における効果測定であり、その高低が将来の福祉実践者としての水準を左右する指標の一つとして考えられる。また個々の学生にとっては、評価結果をもとに実習後の学習計画を組み立てる基準ともなってい

る。しかし我が国で「実習評価」の現状や評価方法に関する研究は非常に少なく^(*)、評価方法についても各養成機関に委ねられている現状である。そのため複数の大学から実習生を受け入れている施設・機関では評価方法が様々なために混乱が生じている。

そこで北海道では、「社会福祉実習」のための現場実習ブロック別研究協議会を契機に該当三大学で協議し、統一した評価様式を作成して、1989年度より実施している(資料1、参照)。その評価様式は、知識・技術・態度および変容という4本柱に基づく20の評価項目と総合評価を設定し、尺度構成法で測定する部分と、総評やアドバイスの記述部分との二部構成をとっている。そして本学の実習教育課程においては、この統一評価様式を実習終了時に「受入施設・機関」と「実習学生」の双方に実施している。そこで得られた「受入側評価」と「学生側の自己評価」結果は、学生への実習後の個別指導や学生の学習展開のために活用されている。また大学側が意図した実習における達成目標がどの程度達成されているかを測定する尺度として用いられている。

そこで本稿では、実習における目標の達成状況を、双方の評価結果から把握することを目的とし、そのために1989年度、本学における社会福祉実習履修学生の「受入側」と「学生側」の評価結果を実証的な手法を用いて分析し、実習教育の課題を探るという方法をとった。

2. 研究の目的と方法

1) 「実習評価」の課題と研究目的

「評価」とは客観的な基準に基づいて測定し、その結果を出すことを目的とする「評定 (valuate)」と、目標追及行動をフィードバックするための情報としての「評価 (evaluate)」に大きく分けられる⁽²⁾。後者の「評価」は、学校教育の学習指導活動の進行において典型的な評価方法であるが、社会福祉実習における評価も同様の意味を持つ。

先に述べた通り、社会福祉実習教育における「評価」の位置付けは、実習教育上の達成目標に対応して達成状況を点検し、課題を明らかにすることである。つまり他者による客観的な評価を実習生本人にフィードバックすることにより、次の学習課題につなげるという「調整機能」を

社会福祉実習における評価について

有する。また、このような学習過程に学習者自身が参加し、自らの課題に対して主体的に取り組むための「自己評価」の重要性が指摘されている⁽³⁾。

実習における「評価」は上述のような実習学生の自己形成過程を把握するためと、同時に、実習のカリキュラム体系と実施状況を点検するためにも必要なことである⁽⁴⁾。すなわち、全体的な実習目標達成状況を点検し、今後の教育方法を改善していくための情報を得るための評価である。したがって評価は、受入先職員による評価と、実習生の「自己評価」の二本建てが必要になる。すなわち「実習生、自らの行った取り組みを自己評価するという行為を通して、職員が自らの処遇と教育能力について自己点検をしている⁽⁵⁾」という考え方にに基づき、双方の実習達成状況を重ね合わせて、実習目標の達成度を点検することである。このような評価の相互性を実現するために、学生・指導教員・指導職員の三者が「評価」をめぐって話し合う「共同実習指導体制」^(※3)の確立が今後の課題である。

しかしながら現状においては、実習学生は「評価」を一種のランク付けのように受け取ったり、指導職員にとっては実習指導から離れた付け足し的な仕事として受け取られがちである。また、実習の評価基準自体が不明確なために、評価者の主観や経験に頼った評価がなされる場合が多いという問題もある⁽⁶⁾。さらに「自己評価」については、自ら設定した目標の達成度を点検することであり、同時に教育成果を測定するものだという視点よりも、実習生自らの実習態度を省みる「自己反省」「自己覚知」⁽⁷⁾における有効性に力点が置かれている。

このような現状の中で、実習評価をめぐる「共同実習指導体制」の実現に向けて働きかけ、同時に実習の達成状況を確認することは、実習教育を進めている大学にとっての重要な課題である。

そこで本稿では、「受入側評価」と「学生側の自己評価」との比較分析を通して、「基本的知識の理解」「基本的実践技術・技能の習得」「実習態度」、及び「実習による変容」という実習目標の達成状況を、以下に挙げる三点から実証的に測定し、そこから実習教育上の課題を探ることを目的としている。

- (1) 実習評価における三側面、及び各評価項目の達成状況の実態を把握し、「受入側」と「学生側」で比較検討する。

- (2) 「受入側評価」と「学生側の自己評価」における実習評価の構造を分析する。
- (3) 実習施設、機関の分野による実習評価の差を検討する。

2) 分析の枠組と手続き

1989年度本学科社会福祉実習Ⅱ(配属実習, 3年次選択, 6単位, 但し社会福祉実習Ⅰの履修済みを条件とする)の履修学生76名の「実習受入側の評価」と「学生の自己評価」結果を分析対象とする。

評価表は, A「基本的知識の理解・習得」が4項目, B「基本的実践技術・技能の習得」が6項目, C「実習態度」6項目, D「実習による変容」4項目と, E「総合評価」の合計21項目より構成される。さらに「学生の自己評価」にはF「実習目標の達成度」が加わり22項目となっている。評価尺度は各項目について「かなり努力を要する」「努力を要する」「良い」「大変良い」の4段階尺度構成法とし, 各柱(A~D)毎に所見欄を設けている。さらにG「具体的評価」とH「長所・短所等のアドバイス」という自由記述欄を設けている。

次に分析の枠組と手続きは次のとおりである。

(1) 実習の達成状況の把握

まず実習の評価項目それぞれについて, 評価段階の分布と平均得点を求める。分布状況について「受入側」と「学生側」で比較し, さらにA~Dの各評価側面の内部で項目間の平均の差を検討する。

(2) 実習評価の構造の分析

「総合評価」とA~Eの20項目の相関係数を算出し, 総合評価との相関の高い項目について, 「受入側」と「学生側」とで比較する。

さらにA~Cの評価三側面それぞれの加重平均得点を算出し, その高低を段階分けし, 三側面を組み合わせパターンとして示す。その段階として, 加重平均の1.0~4.0までを0.5きざみに7段階に分け(1.0~1.5未満, 1.5~2.0未満, …… , 4.0), その段階を組み合わせるとA知識, B技術, C態度の7段階評価の組み合わせができる。それを大きく分けると, A, B, Cの各側面に高低の差があるパターンができる。それらを「水平パターン」「低技術パターン」「高態度パターン」……と名づけ, それぞれに該当する人数比を「学生

側」と「受入側」で比較検討する。

(3) 受入施設・機関の分野による評価の差の検討

実習受入施設・機関を7分野に分類し、分野毎に、高評価項目と低評価項目を比較する。各評価尺度について、7分野の施設の平均得点を、分散分析によって有意差検定をし比較検討する。(2)で行った三側面の評価パターンを分野別に求め、人数・割合を比較する。「学生側」と「受入側」とで比較検討する。

3. 結果と考察

1) 評価結果から見た実習の達成状況

(1) 受入側評価と学生側自己評価の実態

1989年度に実習を履修した学生の「受入施設・機関の評価」と「自己評価」の結果をまとめたものが表1、表2である。それぞれ評価20項目、及び総合評価について「大変良い」から「かなり努力を要す」まで段階別の人数・割合、さらに平均値を示している。まず評価結果の概略を、表1の「受入施設・機関の評価結果」から検討していきたい。受入側評価は全体的に「良い」が6割程度と多く、「大変良い」を加えると9割に達する。一方で「かなり努力を要す」という評価は皆無で、高い評価段階に偏っていると言える。

各項目の高低を相対的に比較すると、高評価項目はC「実習態度」の側面に多く、低評価項目はB「基本的実践技術・技能の習得」とA「基本的知識の理解」の側面に集中している。20項目中、最も評価が高いのは⑪「注意事項や規則遵守」であり、平均値は3.671、「大変良い」という評価段階が7割を占めている。次に高いのは⑭「クライアントの人権・人格の尊重」と⑫「職務習得への意欲・熱意」である。評価が低い項目は⑲「実践技術の深化」で平均値は3.033となっている。続いて⑧「援助に必要な社会資源の活用能力」、④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」への評価が低い。

次に学生の自己評価結果について、表2をもとに検討を加える。評価結果は「大変良い」と「良い」を合わせて7割程度となる項目が多いが、中には半数以上が「努力を要す」に評価している項目があるうえ、「か

表1 受入施設・機関の評価結果

() 内%

評価結果		かなり 努力要す 1.0,1.5	努力要す 2.0,2.5	良 い 3.0,3.5	大変良 い 4.0	非該当	平均	標準偏差	N
評価尺度項目									
A 基本的知識の理解	① クライエント・課題・ニーズの理解		4(5.3)	50(65.8)	22(28.9)		3.250	.539	76
	② 実習した職務の業務内容の理解		1(1.3)	51(67.1)	24(31.6)		3.329	.473	76
	③ 実習施設・機関の機構・機能の理解		5(6.6)	48(63.2)	23(30.3)		3.257	.551	76
	④ 関連する他施設・制度・社会資源の理解		7(9.2)	56(73.7)	13(17.1)		3.092	.501	76
B 基本的実践技術・技能の習得	⑤ クライエントに共感的・理解的に接する技能		5(6.6)	41(53.9)	30(39.5)		3.355	.593	76
	⑥ 実習施設・機関の基本技術の習得		3(3.9)	52(68.4)	20(26.3)	1(1.3)	3.247	.507	75
	⑦ 行事・援助計画の企画・立案・実行能力		5(6.6)	52(68.4)	16(21.1)	3(3.9)	3.164	.521	73
	⑧ 援助に必要な社会資源の活用能力		6(7.9)	58(76.3)	9(11.8)	3(3.9)	3.041	.455	73
	⑨ 適切な対人関係の形成能力		2(2.6)	45(59.2)	29(38.2)		3.375	.530	76
	⑩ 実習日誌や記録を的確に作成する能力		11(14.5)	33(43.4)	32(42.1)		3.296	.703	76
C 実習態度	⑪ 注意事項や規則を遵守する態度		2(2.6)	22(28.9)	52(68.4)		3.671	.520	76
	⑫ 職務習得への意欲・熱意		3(3.9)	29(38.2)	44(57.9)		3.572	.546	76
	⑬ クライエントに積極的に関わろうとする態度		4(5.3)	28(36.8)	44(57.9)		3.559	.571	76
	⑭ クライエントの人権・人格を尊重しようとする態度			32(42.1)	44(57.9)		3.599	.483	76
	⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度		8(10.5)	34(44.7)	34(44.7)		3.368	.650	76
	⑯ 他職種や他職員と協働しようとする態度		2(2.6)	44(57.9)	30(39.5)		3.401	.517	76
D 実習による変容	⑰ クライエントやニーズ理解の深化		1(1.3)	43(56.6)	32(42.1)		3.428	.514	76
	⑱ 実践現場の理解の深化			38(50.0)	38(50.0)		3.520	.493	76
	⑲ 実践技術・技能の深化		6(7.9)	62(81.6)	8(10.5)		3.033	.435	76
	⑳ 自己理解の深化		1(1.3)	41(53.9)	34(44.7)		3.454	.518	76
E	総合評価			41(53.9)	35(46.1)		3.487	.490	76

社会福祉実習における評価について

表2 学生の自己評価結果

() 内%

評価結果		かなり 努力要す 1.0, 1.5	努力要す 2.0, 2.5	良 い 3.0, 3.5	大変良 い 4.0	非該当	平均	標準偏差	N
評価尺度項目									
A 基本的知識の理解	① クライアント・課題・ニーズの理解		16(21.1)	56(73.7)	4(5.3)		2.842	.491	76
	② 実習した職務の業務内容の理解	1(1.3)	14(18.4)	44(57.9)	17(22.4)		3.020	.676	76
	③ 実習施設・機関の機構・機能の理解		14(18.4)	53(69.7)	9(11.8)		2.947	.533	76
	④ 関連する他施設・制度・社会資源の理解	2(2.6)	40(52.6)	30(39.5)	4(5.3)		2.480	.640	76
B 基本的実践技術・技能の習得	⑤ クライアントに共感的・理解的に接する技能		15(19.7)	41(53.9)	19(25.0)	1(1.3)	3.060	.675	75
	⑥ 実習施設・機関の基本技術の習得	3(3.9)	40(52.6)	28(36.8)	5(6.6)		2.467	.690	76
	⑦ 行事・援助計画の企画・立案・実行能力	8(10.5)	35(46.0)	17(22.4)	6(7.9)	10(13.2)	2.349	.831	66
	⑧ 援助に必要な社会資源の活用能力	8(10.5)	47(61.8)	16(21.1)	2(2.6)	3(3.9)	2.333	.815	73
	⑨ 適切な対人関係の形成能力	4(5.3)	16(21.1)	46(60.5)	10(13.2)		2.816	.725	76
	⑩ 実習日誌や記録を的確に作成する能力	5(6.6)	26(34.2)	39(51.3)	6(7.9)		2.612	.728	76
C 実習態度	⑪ 注意事項や規則を遵守する態度		6(7.9)	24(31.6)	46(60.5)		3.533	.629	76
	⑫ 職務習得への意欲・熱意		10(13.2)	42(55.3)	24(31.6)		3.191	.648	76
	⑬ クライアントに積極的に関わろうとする態度		12(15.8)	34(44.7)	30(39.5)		3.243	.709	76
	⑭ クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度		4(5.3)	41(53.9)	31(40.8)		3.355	.582	76
	⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度	3(3.9)	23(30.3)	38(50.0)	11(14.5)	1(1.3)	2.760	.750	75
	⑯ 他職種や他職員と協働しようとする態度	2(2.6)	11(14.5)	47(61.8)	15(19.7)	1(1.3)	3.007	.670	75
D 実習による変容	⑰ クライアントやニーズ理解の深化		12(15.8)	48(63.2)	16(21.1)		3.066	.591	76
	⑱ 実践現場の理解の深化		5(6.6)	41(53.9)	30(39.5)		3.336	.585	76
	⑲ 実践技術・技能の深化	2(2.6)	38(50.0)	31(40.8)	5(6.6)		2.520	.671	76
	⑳ 自己理解の深化	3(3.9)	15(19.7)	38(50.0)	20(26.3)		2.993	.785	76
E	総合評価		12(15.8)	61(80.3)	3(3.9)		2.895	.427	76

なり努力を要す」も11項目に見られる。したがって学生の自己評価は受入側の評価より平均値の分散も大きく、かなり低い段階に分布が広がっている。

次に評価の高低を見ると高評価項目はC「実習態度」に多く、A「基本的知識の理解」とB「基本的実践技術・技能の習得」の側面はかなり低評価となっており、受入側評価と同様の傾向がある。20項目中評価が高いのは⑪「注意事項や規則を遵守する態度」で平均値は3.533、続いて⑭「クライアントの人権・人格の尊重」が3.355である。かわって、低評価項目は③「援助に必要な社会資源の活用能力」で平均値は2.333、分布状況は7割以上が「努力を要す」と評価している。次に低いのは⑦「行事・援助計画の企画・立案・実行能力」、⑥「実習施設・機関の基本技術・技能の習得」であり、受入側の低評価項目と若干の相違があるが、実践技術面が低いという点では同様の傾向を示している。

以上、二つの評価結果を整理すると次のことが言える。まず受入側よりも学生側の評価段階が低く、分散が大きいこと。20項目の評価尺度間で評価結果に差があること。さらに評価の三側面においても相対的な違いがあり、実習態度よりも基本的知識や実践技術・技能の側面に含まれる項目に低評価が多い。そしてこれらの傾向は受入側・学生側に共通している。したがって実習目標の達成状況に関しては、評価項目や評価の三側面によって格差があり、特に実践技術の習得の達成状況が低いことが確認された。

(2) 受入側と学生側の評価格差について

「受入施設・機関」と「学生」の実習評価を比較することにより、実習の達成状況と課題を検討することがここでの目的である。

今まで概観したように、各評価項目や三側面の達成状況は、受入側と学生側ではほぼ同様の傾向を示すが、学生の自己評価の方が相当低く分布している。この特徴は、学生による自己評価が自己反省や謙遜のために他者による客観的評価よりも低くなる傾向があるためであると了解される。しかし、以下の表3～表10における評価の分布を比較したところ、受入側と学生の評価の差の大きさは項目によって違いがあることが確認された。つまり、学生側の過小評価による実習評価結果の低下であるな

社会福祉実習における評価について

らば、それは一律の低下となるはずだが、項目間に差の違いが認められる。このことから、受入施設・機関と学生との間で実習に対する期待水準に何らかの相違があることが予想される。評価の各側面および変容についての評価格差の分析に移りたい。

A. 基本的知識の理解について

表3-1, 2は基本的知識の理解の側面に関する4評価項目の平均値の差（t検定結果と有意水準）を表わしたものである。表3-1より、受け入れ側の評価の差を見ると、④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」が他の項目よりも低い。また、表3-2より学生側評価も同様に④が最も低評価であり、その差は受入側よりも明確である。

表4では、これら4項目について受入側と学生側の分布状況（割合）を比較し、有意水準を示したものである。結果は、どの項目においても学生側の評価は低く分布し、「良い」「努力を要す」に傾いている。特に両者ともに低評価の④の差は大きく、学生側評価が非常に低い。このことは、学生その他施設・制度・社会資源に対する認識の不足が一因と考えられる。しかし一方で、実習内容が実習施設・機関の内側だけに集中し、学生にとっては外部との関連を具体的に意識できない場合があることも一因と考えられる。

表3 基本的知識の項目間の差

1. 受入側

平均	①	②	③	④
① 3.250				
② 3.329	.954			
③ 3.257	.079	.859		
④ 3.092	1.859	**②>④ 2.979	1.919	

2. 学生側

平均	①	②	③	④
① 2.842				
② 3.020	1.845			
③ 2.947	1.255	.734		
④ 2.480	***①>④ 3.886	***②>④ 5.024	***③>④ 4.856	

注) t 検定の結果と有意差を示す

有意水準について 本論文では、有意水準を左記のように表記する。
 * 5%水準
 ** 1%水準
 ***0.1%水準

表 4 受入側と学生側の評価の差

基本的知識の理解の側面

評価尺度項目	評価結果	評価段階	受入側 評 価	学生側 評 価	z値	有意水準
① クライアント・課題・ ニーズの理解	大変良い		28.9	5.3	20.001	***
	良 い		65.8	73.7		
	努力要す		5.3	21.1		
② 実習した職務の業務内容 の理解	大変良い		31.6	22.4	13.961	***
	良 い		67.1	57.9		
	努力要す		1.3	19.7		
③ 実習施設・機関の機構・ 機能の理解	大変良い		30.3	11.8	10.636	**
	良 い		63.2	69.7		
	努力要す		6.6	18.4		
④ 関連する他施設・制度・ 社会資源の理解	大変良い		17.1	5.3	37.625	***
	良 い		73.7	39.5		
	努力要す		9.2	55.3		

注) 受入側評価と学生側評価は各々%を示す。
「努力要す」は「かなり努力を要す」を含む

B. 基本的実践技術・技能の習得について

実践技術・技能の習得に関する評価項目は、受入側・学生側ともに低評価であることは既に述べた。表5-1, 2より、この側面の各項目間の平均を比較すると、受入側では⑧「援助に必要な社会資源の活用能力」と⑦「行事・援助計画の企画・立案・実行能力」が有意に低い。学生の自己評価でも⑧, ⑦, さらに⑥「実習施設・機関の基本技術の習得」が非常に低評価になっており、受入側と同様の傾向を示している。さらに学生側は、⑤「クライアントに共感的・理解的に接する技能」が他項目

表 5 基本的実践技術・技能の項目間の差

1. 受入側

平均	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
⑤	3.355					
⑥	3.247	1.194				
⑦	3.164	2.071	.976			
⑧	3.041	3.592	2.581	1.509		
⑨	3.375	.218	1.506	2.433	4.092	
⑩	3.296	.556	.487	1.289	2.599	.777

よりも高い。したがって学生にとっては、実習場面における具体的で意図的な援助技術の習得よりも、クライアントとの関わりについての達成感の方が高いという結果である。

表6から両者の評価を比較すると、⑤「クライアントに共感的・理解的に接する技能」の差は小さいが、他の5項目では学

社会福祉実習における評価について

2. 学生側

平均	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
(5)	3.060					
(6)	2.467	5.291				
(7)	2.349	5.551	.918			
(8)	2.333	5.866	1.077	.114		
(9)	2.816	2.121	4.041	3.551	3.800	
(10)	2.612	3.834	1.243	1.896	2.191	1.720

注) t 検定の結果と有意差を示す。

生側の評価が非常に低い。特に⑥⑦⑧の具体的な実践技術に関する項目は、受入側では「良い」が7割を占めるのに対し、学生側は「努力を要す」が5～7割を占めており、有意差が顕著である。

実践技術に関する⑥⑦⑧の分布を前述の表1, 2で確認すると、これらの項目には「非該当」

表6 受入側と学生側の評価の差

基本的実践技術・技能の習得の側面

評価尺度項目	評価結果	評価段階	受入側 評価	学生側 評価	χ^2 値	有意水準
⑤ クライアントに共感的・ 理解的に接する技能	大変良い	39.5	25.3	7.463	*	
	良い	53.9	54.7			
	努力要す	6.6	20.0			
⑥ 実習施設・機関の基本技 術の習得	大変良い	26.7	6.6	50.978	***	
	良い	69.3	36.8			
	努力要す	4.0	56.5			
⑦ 行事・援助計画の企画・ 立案・実行能力	大変良い	21.9	9.1	52.162	***	
	良い	71.2	25.8			
	努力要す	6.8	65.2			
⑧ 援助に必要な社会資源の 活用能力	大変良い	12.3	2.7	67.653	***	
	良い	79.5	21.9			
	努力要す	8.2	75.3			
⑨ 適切な対人関係の形成能 力	大変良い	38.2	13.2	23.995	***	
	良い	59.2	60.5			
	努力要す	2.6	26.3			
⑩ 実習日誌や記録を的確に 作成する能力	大変良い	42.1	7.9	27.813	***	
	良い	43.4	51.3			
	努力要す	14.5	40.8			

という評価が若干ある。この「非該当」とは、実習期間中にその評価項目に対応するプログラムがなかったために評価できないことを意味する。すなわち「基本技術の習得」や「援助計画の立案」などの具体的な実践能力の習得には、実習生に対する具体的な場面設定が必要であるが、そのような場が設けられなかった場合には「非該当」と評価されるので

ある。実際、⑦「行事・援助計画の企画・立案・実行」についての評価は、受入側の非該当3名、学生側10名となっている。また、「非該当」数が学生側に多いのは、実習場面において指導職員から設定された設定場面を、学生がそのように受け取らなかったという認識のずれがあることも考えられる。このように実践技術の側面の評価格差を解釈するうえでは、4週間という実習期間において習得可能な技術内容についての考え方や条件の問題を考慮する必要がある。

C. 実習態度について

実習態度の側面は相対的に評価が高い。しかし表7-1より、受入側は⑮「職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度」と⑯「他職種や他職員と協働しようとする態度」への評価が有意に低い。一方で、表

7-2より、学生側も⑬⑯の職員との積極的な関わりに関しては自己評価が低く、受入側評価と共通している。また、学生は⑪「注意事項や規則を遵守する態度」への自己評価が他項目よりも高い。これは出退勤時間など評価基準が明確なため、高い評価になったと考えられる。

表8から評価格差を見ると、基本的知識や実践技術の側面よりも、受入側と学生側の評価差が小さい。⑪「注意事項や規則を遵守する態度」には有意な差が認められず、⑬「クライアントに積極的に関わろうとする態度」と⑭「クライアントの人権・人格の尊重」の格差も他と比較して小さい。その反面、⑮「職員の指導・助言を積極的に求め

表7 実習態度の項目間の差

1. 受入側

平均	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
⑪	3.671					
⑫	3.572	1.137				
⑬	3.559	1.256	.143			
⑭	3.599	.897	.321	.463		
⑮	3.368	**⑪>⑮	**⑫>⑮	**⑬>⑮	2.470	
⑯	3.401	**⑪>⑯	1.969	1.776	2.424	.341

2. 学生側

平均	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
⑪	3.533					
⑫	3.191	**⑪>⑫				
⑬	3.243	**⑪>⑬	.469			
⑭	3.355	1.799	1.630	1.057		
⑮	2.760	***⑪>⑮	***⑫>⑮	***⑬>⑮	***⑭>⑮	
⑯	3.007	***⑪>⑯	1.704	2.088	3.386	2.127

注) t 検定の結果と有意差を示す

社会福祉実習における評価について

ようとする態度」の差は大きく、学生の自己評価が低くなっている。このことから、実習場面において学生は、規則を守り、熱心な勤務態度で積極的にクライアントと関わっているが、職員との指導関係・協働関係を築くという点では充分達成できていない、という実態を読み取ることができる。

表 8 受入側と学生側の評価の差

評価尺度項目	評価結果		受入側 評価	学生側 評価	χ ² 値	有意水準
	評価段階					
⑪ 注意事項や規則を遵守する態度	大変良い 良い 努力要す		68.4 28.9 2.6	60.5 31.6 7.9	2.453	
⑫ 職務習得への意欲・熱意	大変良い 良い 努力要す		57.9 38.2 3.9	31.6 55.3 13.2	12.032	**
⑬ クライアントに積極的に関わろうとする態度	大変良い 良い 努力要す		57.9 36.8 5.3	39.5 44.7 15.8	7.229	*
⑭ クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度	大変良い 良い 努力要す		57.9 42.1 0.0	40.8 53.9 5.3	7.363	*
⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度	大変良い 良い 努力要す		44.7 44.7 10.5	14.7 50.7 34.7	21.502	***
⑯ 他職種や他職員と協働しようとする態度	大変良い 良い 努力要す		39.5 57.9 2.6	20.0 62.7 17.3	13.160	**

表 9 実習による変容の項目間の差

1. 受入側

平均	⑰	⑱	⑲	⑳
⑰	3.428			
⑱	3.520	1.119		
⑲	3.033	*** ^{02>13} 5.080	*** ^{03>13} 6.415	
⑳	3.454	.308	.799	*** ^{09>19} 5.390

D. 実習による変容について

実習による変容とは、実習開始時の状態から見た終了時の変容の割合を評価するもので、A～Cの三側面とは評価の視点が異なる。

表 9-1 から受入側評価の項目間の差を比較する

2. 学生側

平均	(17)	(18)	(19)	(20)
(17)	3.066			
(18)	3.336	**09>07		
(19)	2.520	***07>09	***08>09	
(20)	2.993	.643	**18>20	***20>19

注) * 検定の結果と有意差を示す。

と、全体に評価は高いが⑱「実践技術・技能の深化」のみが、他より落ち込んでいる。表9-2より、同様の傾向が学生の自己評価にも言えるが、学生側は⑱「実践現場に対する理解の深化」の項目が最も高い。これは現場理解という漠然と

したリアリティショックを表わしており、学生にとって実習はこのような変容過程であったとの解釈が可能である。

そこで表10から評価格差を検討すると、⑱「実践技術・技能の深化」について学生の自己評価が最も低く、受入側との差が大きい。これはB「基本的実践技術・技能の習得」の側面で得られた結果と共通している。その他⑳「自己理解の深化」についても学生の自己評価はかなり低くなっている。

表10 受入側と学生側の評価の差

実習による変容

評価尺度項目	評価結果	評価段階	受入側 評価	学生側 評価	χ^2 値	有意水準
⑰ クライエントやニーズ理解の深化	大変良い		42.1	21.1	14.916	***
	良い		56.6	63.2		
	努力要す		1.3	15.8		
⑱ 実践現場の理解の深化	大変良い		50.0	39.5	6.055	*
	良い		50.0	53.9		
	努力要す		0.0	6.6		
⑲ 実践技術・技能の深化	大変良い		10.5	6.6	36.156	***
	良い		81.6	40.8		
	努力要す		7.9	52.6		
⑳ 自己理解の深化	大変良い		44.7	26.3	18.954	***
	良い		53.9	50.0		
	努力要す		1.3	23.7		

以上、受入側と学生側の評価において、学生の自己評価は全体に低いですが、その中でも評価格差が大きい項目と小さい項目があるという結果が得られた。格差が大きい評価項目は「社会資源の活用」や「行事・援助

計画の立案」など具体的な場面設定を要する内容であり、一方格差が小さい項目は、「規則の遵守」や「クライアントと関わる態度や技能」、そして「実践現場の理解」という評価内容である。

2) 受入側と学生側の「評価構造」の検討

前節では各評価項目や三側面についての評価結果から、実習達成状況にある程度把握することができた。しかし各項目に対する受入側と学生側の評価格差は、実習目標水準や期待水準を背景としていることを解釈の中でいくつか述べたが、全体的な考察までは至らなかった。そこで評価全体における各評価項目の重みづけがどのようになっているのか、あるいは項目間の相関関係や評価パターンなどを検討することで「評価構造」を析出し、それをを用いることで評価結果への解釈を深めることが可能と思われる。

これらの観点から、第一に「総合評価」と他の評価尺度項目との相関を分析し、第二に、知識・技術・態度という三側面のパターンによる分析を行う。以上の分析を実習受入側と学生側の双方について行い、それぞれの「評価構造」の比較検討を試みたい。

(1) 総合評価と各評価項目の相関の分析

「総合評価」と20の評価尺度項目との相関の強さを分析する前提として、「総合評価」の位置づけを整理する必要がある。

「総合評価」とは、各評価項目の単純な加算平均として考えられる場合や、細部の評価項目とは別の全体的な評定と考えられる場合がある。ここで用いている「総合評価」について見ると、計算上では必ずしも全項目の平均点として表わされているのではなく、全体的（ある意味で印象的）な評定となっているのが現状である。

そこで各評価尺度項目のうち、どの項目が全体的な評定（印象）に影響を与えているのかを相関の強さから判断しようとするものである。表11は受入側と学生側双方の「総合評価」と各評価項目の相関係数、及び有意水準を列記している。さらに相関係数が高い順に1位から6位までの順位を記入してある。

受入側の評価では、「総合評価」は20項目全てと有意な相関がある。

表11 総合評価と各評価尺度との相関

評価尺度	総合評価との相関		学生側の評価	
	相関係数	有意水準	相関係数	有意水準
① クライアント・課題・ニーズの理解	.5883	** (6)	.5930	** (2)
② 実習した職務の業務内容の理解	.5086	**	.4226	**
③ 実習施設・機関の機構・機能の理解	.5009	**	.4153	**
④ 関連する他施設・制度・社会資源の理解	.4891	**	.2291	
⑤ クライアントに共感的・理解的に接する技能	.6158	** (3)	.4600	**
⑥ 実習施設・機関の基本技術の習得	.5120	**	.5200	** (6)
⑦ 行事・援助計画の企画・立案・実行能力	.3462	*	.2636	
⑧ 援助に必要な社会資源の活用能力	.4082	**	.4053	**
⑨ 適切な対人関係の形成能力	.6229	** (2)	.6150	** (1)
⑩ 実習日誌や記録を的確に作成する能力	.4687	**	.3220	*
⑪ 注意事項や規則を遵守する態度	.3941	**	.2339	
⑫ 職務習得への意欲・熱意	.5645	**	.5209	** (4)
⑬ クライアントに積極的に関わろうとする態度	.4852	**	.3234	*
⑭ クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度	.5815	**	.4295	**
⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度	.6015	** (5)	.2242	
⑯ 他職種や他職員と協働しようとする態度	.6351	** (1)	.2905	*
⑰ クライアントやニーズ理解の深化	.5102	**	.5640	** (3)
⑱ 実践現場の理解の深化	.5321	**	.4057	**
⑲ 実践技術・技能の深化	.3215	*	.5209	** (4)
⑳ 自己理解の深化	.6042	** ①	.4252	**

注) 各(1)～(6)は総合評価との相関が高い順番を示す

評価項目の中で最も相関が高い項目は、C-⑬「他職種や他職員と協働しようとする態度」である。続いてB-⑨「適切な対人関係形成能力」、B-⑤「クライアントに共感的・理解的に接する技能」、D-⑳「自己理解の深化」、さらにC-⑮「職員の指導助言を積極的に求めようとする態度」、A-①「クライアント・課題・ニーズの理解」である。

一方、学生の自己評価では20項目中、有意な相関が認められないものが4項目ある。この4項目の平均値を表2より確認すると、全体の中で極端に低評価の項目と高評価の項目であった。つまり、学生の大多数が高く評価している項目、または低く評価している項目である。学生の「総合評価」と最も相関の高い項目はB-⑨「適切な対人関係形成能力」である。次にA-①「クライアント・課題・ニーズの理解」、D-⑰「クライアントやニーズ理解の深化」、続いてC-⑫「職務習得への意欲・熱意」、D-⑲「実践技術・技能の深化」、B-⑥「実習施設・機関の基本技術の習得」である。

社会福祉実習における評価について

以上の結果から、受入側と学生側では相関の高い項目に、相違点と共通点が認められる。まず「適切な対人関係の形成」や「クライアント・課題・ニーズの理解」との相関が高い点は、両者に共通している。ところが受入側の特徴は、実習の態度的側面、特にC-⑮、⑯のような職員集団との協働や、指導を受ける姿勢との相関が高いことである。また実習による変容の側面では「自己理解の深化」との相関が高い。これに対して学生側は、A-①、C-⑰のクライアントやニーズの理解に重点があること、そしてD-⑲、B-⑥など、実践技術・技能の習得と相関が高いことが特徴である。要するに、受入側は実習態度・自己理解を、学生側はクライアント理解や実践技術の習得を「総合評価」の判定基準にしていると推測できよう。この判断基準の相違は、また両者の実習の達成目標、あるいはイメージの差として解釈することもできよう。

(2) 評価三側面のパターンによる分析

次に評価三側面という視点から、それぞれの達成状況や個人内での各側面の組み合わせの分析を行った。

まず表12は、評価の各側面ごとに加重平均得点を算出し、受入側・学生側の差をtテストにより求め、有意水準を表わしたものである。これによって得られた結果は、評価尺度項目ごとに検討した場合と同様に、学生の自己評価は受入側の評価よりも有意に低い。しかし、その格差は各側面によって異なり、B「基本的実践技術・技能の習得」における差が最も大きい。続いてA「基本的知識の理解・習得」、C「実習態度」という順になっている。また表13-1、13-2、より受入側と学生側で三側面の平均値を比較すると、受入側では実習態度のみが高く、学生側は実習態度、基本的知識の理解・習得、基本的実践技術・技能の習得という順に平均値が低下している。

この三側面の平均を用いて、個人内の評価の組み合わせを単純に表わした「評価パターン」を作り、受入側・学生側で比較を行った。このパターンは、個人内でA～Cの「知識」「技術」「態度」の評定が相対的にどう組み合わせられているかという視点から、全体的な実習の達成状況を把握しようと試みるものである。評価パターン作成の手続きは、分析枠組と手続きで述べた通り、各側面について個人の平均得点を等間隔で7段階

表12 評価の三側面ごとの加重平均得点の差

評価尺度	N	平均	SD	t 値	有意水準
A 基本的知識の理解・習得の状況	76	3.232	.412	6.050	***
	76	2.822	.418		
B 基本的実践技術・技能の習得の状況	60	3.265	.397	8.136	***
	60	2.597	.490		
C 実習態度の状況	74	3.538	.396	4.997	***
	74	3.189	.447		

注) 上段は受入側の評価、下段は学生の自己評価

表13 評価三側面の各平均値の差 (検定結果)

1. 受入側

平均	A	B	C
A 3.232			
B 3.265	.468		
C 3.538	*** C>A 4.605	*** C>B 3.934	

2. 学生側

平均	A	B	C
A 2.822			
B 2.597	** A>B 2.866		
C 3.189	*** C>A 5.161	*** C>B 7.246	

注) t 値と有意差を示す

に階層分けし、それを三側面について組み合わせた。三側面の評定の平均が全て同段階であれば「水平パターン」、技術だけが低い場合は「低技術パターン」と名づけ、それぞれの該当人数・割合を算出した。その結果、三側面の組み合わせは受入側、学生側ともに7パターンに分類され、それを簡単な図とともに示したのが表14である。

受入側、学生側ともに多いパターンは、三側面の評定が同段階の「水平型」、技術面だけが落ち込んだ「低技術型」、態度面が高い「高態度型」で、この三パターンだけで全体の85%に達する。その他、度数は少ないが、「低知識型」「低態度型」「高知識型」「低知識・高態度型」もある。受入側と学生側で各パターンの分布を分析すると、受入側は「水平型」と「高態度型」が6割弱を占め、学生側は「低技術型」だけで半数に達する。表15より、両者の差を比較すると、受入側は「水平型」の割合が学生より多く、学生は「低技術型」が受入側と比べ2倍の割合になっており、有意な差が認められる。

したがって評価パターンの分析から、学生の自己評価において三側面の中で実践技術・技能の習得に不足を感じている者が多いが、受入側は

社会福祉実習における評価について

そのような傾向は少ない、すなわち両者の評価パターンにずれが生じていることが確認された。以上の傾向を、(1)の「総合評価」との相関の結果と合わせて検討しても、学生の「技術習得志向」が顕著に表われている。

表14 評価の三側面(知識・技術・態度)のパターン別人数 ()内%

得点のパターン	受入側の評価	学生側の評価
水平型	20(28.2)	8(12.3)
低技術型	17(23.9)	32(49.2)
高態度型	21(29.6)	17(26.2)
低知識型	5(7.0)	3(4.6)
低態度型	2(2.8)	0(0.0)
高知識型	4(5.6)	2(3.1)
低知識、高態度型	2(2.8)	3(4.6)
合計	71(100.0)	65(100.0)

表15 評価パターンの受入側と学生側の差 ()内%

	受入側	学生側	合計
水平型	20(28.2)	8(12.8)	28(20.6)
低技術型	17(23.9)	32(49.2)	49(36.0)
高態度型	21(29.6)	17(26.2)	38(27.9)
その他	13(18.3)	8(11.3)	21(15.4)
合計	71	65	136

$$\chi^2=11.103 \quad df=3 \quad *$$

3) 受入施設・機関による実習評価の差

1989年度実習生76名の受入施設・機関は55か所に及ぶが、実習生を分野別に分類すると、福祉事務所(社協も含む、8名)、各種相談機関(児相、婦相、更相、14名)、児童福祉施設(障害児施設を除く、18名)、心身障害児施設(12名)、心身障害者施設(7名)、老人ホーム(12名)、病院(5名)となる。ここでは、これら7分野の施設・機関による実習評価の差について検討を加えたい。

表16 分野別、高評価項目と低評価項目 (各2位まで)

		福祉事務所	相談機関	児童福祉施設	心身障害児施設	心身障害者施設	老人ホーム	病 院
受入側評価	高評価項目	⑫ 3.875 ⑭⑯ 3.750 ⑰⑱⑲⑳	⑪ 3.857 ⑫ 3.768	⑪ 3.444 ⑱ 3.417	⑬ 3.750 ⑲⑳ 3.583	⑮⑳ 4.000 ㉑ 3.857	⑬ 3.833 ⑰ 3.750	⑮⑱ 4.000 ⑲⑳⑳ 3.600 ㉑
	低評価項目	⑬ 3.250 ⑳⑳ 3.500 ㉑⑳	⑮⑱ 3.143 ㉑ 3.208	⑫ 2.750 ⑳ 2.765	⑮ 3.000 ⑰ 3.042	⑱⑲ 3.571 ⑳⑳ 3.429 ㉑	⑬ 3.833 ⑰⑰ 3.750 ㉑	⑮ 2.750 ⑰ 2.800
学生側評価	高評価項目	⑮⑱ 3.688 ⑲ 3.375	⑮⑱ 3.643 ⑳ 3.214	⑲ 3.556 ㉑ 3.500	⑰⑱ 3.417 ㉑⑲ 3.375 ㉑	⑰⑱ 3.571 ㉑⑲ 3.429 ㉑⑲	⑲ 3.667 ⑲⑲ 3.500	⑲⑲ 3.600 ㉑⑲ 3.400 ㉑
	低評価項目	⑰ 1.813 ⑳ 2.125	⑱ 2.143 ㉑ 2.250	⑳ 2.313 ㉑ 2.444	⑰ 2.208 ⑱ 2.227	⑱ 1.857 ㉑ 2.143	⑱⑱ 2.417 ㉑ 2.583	⑰ 1.667 ⑱ 1.800

注) この表は、項目番号(下記)と平均値を示す。

(1) 各分野内の高評価項目と低評価項目の比較

表16は、各分野における20項目中の高評価項目と低評価項目(各2位まで)を表わしている。後にも述べるが、学生側評価は分野による差が認められず一律であるため、受入側各分野における高・低評価項目の内容を分析し、分野毎の評価の特徴を検討していきたい。

基本知識	A	① クライアント・課題・ニーズの理解
		② 実習した職務の業務内容の理解
		③ 実習施設・機関の機構・機能の理解
		④ 関連する他施設・制度・社会資源の理解
基本的実践技術	B	⑤ クライアントに共感的・理解的に接する技能
		⑥ 実習施設・機関の基本技術の習得
		⑦ 行事・援助計画の企画・立案・実行能力
		⑧ 援助に必要な社会資源の活用能力
		⑨ 適切な対人関係の形成能力
		⑩ 実習日誌や記録を的確に作成する能力
実習態度	C	⑪ 注意事項や規則を遵守する態度
		⑫ 職務習得への意欲・熱意
		⑬ クライアントに積極的に関わろうとする態度
		⑭ クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度
要 容		⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度
		⑯ 他職種や他職員と協働しようとする態度
	D	⑰ クライアントやニーズ理解の深化
		⑱ 実践現場理解の深化
		⑲ 実践技術・技能の深化
E	⑳ 自己理解の深化	
	総合評価	

(福祉事務所・社協)

高評価項目は⑫「職務習得への意欲・熱意」、続いて④、⑥、⑩、⑪、⑭、⑰、⑳と各側面の項目が並び、特徴が把握しがたい。低評価項目は

社会福祉実習における評価について

⑬「実践技術・技能の深化」、さらに③「実習施設・機関の機構・機能の理解」と基本的技術・技能に関する各項目である。

(相談機関)

高評価項目には⑪「注意事項や規則を遵守する態度」と⑫「職務習得への意欲・熱意」で、いずれも実習態度に関する項目である。一方、低評価は⑧「援助に必要な資源の活用能力」、⑬「実践技術・技能の深化」⑦「行事・援助計画の企画・立案・実行能力」で実践技術・技能に関する項目が低い。

(児童福祉施設)

高評価項目は⑪「注意事項や規則を遵守する態度」と⑭「クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度」で、いずれも実習態度に関する項目である。低評価項目は④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」と⑧「援助に必要な社会資源の活用能力」であり、施設内の処遇のみならず、関連する外部機関との連携に関わる項目への評価が低い。

(心身障害者施設)

最も評価が高い項目は⑬「クライアントに積極的に関わろうとする態度」であり、次に⑭「クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度」と⑮「実践現場理解の深化」である。これに対し、低評価項目は⑬「実践技術・技能の深化」と④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」である。

(心身障害者施設)

高評価項目は⑪「注意事項や規則を遵守する態度」、⑮「実践現場理解の深化」、⑯「自己理解の深化」であり、実習による変容の側面が中心である。低評価項目は⑧「援助に必要な社会資源の活用能力」と⑩「実習日誌や記録を的確に作成する能力」、さらに③「実習施設・機関の機構・機能の理解」、④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」及び⑬「実践技術・技能の深化」と、多くの側面にわたっている。

(老人ホーム)

高評価項目は⑬「クライアントに積極的に関わろうとする態度」、続いて⑪「注意事項や規則を遵守する態度」と、いずれも実習態度の側面である。低評価項目は、⑬「実践技術・技能の深化」、及び④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」、⑥⑧の実践・技術・技能に関する

項目である。

(病院)

病院は実習機関が5機関と少ないため明確な傾向は把握できないが、高評価項目としては⑪「注意事項や規則を遵守する態度」、⑬「クライアントに積極的に関わろうとする態度」、さらに⑭や⑯の実習態度の側面と、⑰、⑱のクライアントや実践現場への理解の深化という変容の側面に集中している。一方、低評価項目は③「援助に必要な社会資源の活用能力」と④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」であり、業務上必要な基本的知識や能力に関する項目となっている。

以上の受入側の評価結果から、分野ごとにいくつかの傾向が読み取れる。まず、高評価項目はどの分野も実習態度と変容の側面（但し、「実践・技術」面を除く）に集中している。その中でも福祉事務所や相談機関は「職務習得の熱意・意欲」という広い実習態度への評価が高い。一方、児童施設や老人ホームなどの入所施設の評価は、クライアントへの関わりや人権尊重など、対クライアントの態度への評価が高い。さらに入所施設の中でも、心身障害児・者施設と病院の分野では、対クライアントの態度に加えて、自己理解や現場理解という実習による変容の側面への評価が高いことが特徴である。次に低評価項目では「実践技術・技能の深化」という変容の側面と、「援助に必要な社会資源の活用」や「援助計画の企画・立案・実行」など、具体的実践能力に対する評価は、どの分野においても低いという傾向がある。さらに「関連する他施設・制度・社会資源の理解」に対する評価も低い。このように各分野により評価項目に差異が認められる。

(2) 施設分野による評価の差

実習先の分野による実習評価の差の検討に移りたい。施設分野による評価の差を受入側、学生側、それぞれ列記したのが表17である。各評価項目について各分野の平均の差を比較するために、分散分析を実施しその結果としてF値と有意水準を記した。この表からわかるように受入側は、20項目中12項目と総合評価において分野による有意差があるが、学生の自己評価において分野による差が全く認められない。すなわち、学生の評価基準は実習先の分野にかかわらず一定しているのに対し、受入

社会福祉実習における評価について

側では分野によって評価基準にばらつきがあることを表している。

そこで分野による差を詳しく分析するため、表18は表17で有意差がある総合評価を含む13の評価項目について、平均値と標準偏差を示してある。共通して言えることは、全体的に福祉事務所の評価は高く、児童福祉施設の評価はかなり低いことである。また、分野間の差が大きい項目は、④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」と⑧「援助に必要な社会資源の活用能力」と⑬「クライアントに積極的に関わろうとする能力」の3項目である。図1は各項目の平均の差をグラフ化したものだが、施設、機関の分野の順位（高低）は一律ではなく、項目によって入れ替わりがある。そこで各評価項目において、どの分野の評価が特に低いのか（高いのか）を検討するため、表19では各評価項目における最大値と最小値を除き、有意差検定を試みた。この結果、分野間の有意水準が低下することから、最大値、最小値が突出していることが確認された。例えば、評価項目⑮「職員の指導・助言を求めようとする態度」や

表17 分野による実習評価の差－受入側と学生側の有意差検定結果－

評価尺度項目		評価結果		受入側評価		学生の自己評価	
		F値	有意水準	F値	有意水準	F値	有意水準
A 基本知識	① クライアント・課題・ニュースの理解	3.055	*	.246	.96		
	② 実習した職務の業務内容の理解	1.335	.25	.491	.81		
	③ 実習施設・機関の機構・機能の理解	2.799	*	1.041	.40		
	④ 関連する他施設・制度・社会資源の理解	6.150	***	1.143	.34		
B 基本的実践技術	⑤ クライアントに共感的・理解的に接する技能	1.258	.28	1.420	.22		
	⑥ 実習施設・機関の基本技術の習得	2.719	*	.903	.49		
	⑦ 行事・援助計画の企画・立案・実行能力	2.233	.05	1.595	.16		
	⑧ 援助に必要な社会資源の活用能力	3.419	**	1.019	.42		
	⑨ 適切な対人関係の形成能力	1.094	.37	.563	.75		
	⑩ 実習日誌や記録を的確に作成する能力	2.287	*	1.312	.26		
C 実習態度	⑪ 注意事項や規則を遵守する態度	3.005	*	.259	.95		
	⑫ 職務習得への意欲・熱意	1.762	.12	.516	.79		
	⑬ クライアントに積極的に関わろうとする態度	3.151	**	1.525	.18		
	⑭ クライアントの人権・人格を尊重しようとする態度	1.377	.23	.976	.44		
	⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度	2.699	*	.877	.51		
	⑯ 他職種や他職員と協働しようとする態度	2.479	*	.553	.76		
D 変容	⑰ クライアントやニュース理解の深化	1.394	.23	.488	.81		
	⑱ 実践現場の理解の深化	2.953	*	.659	.68		
	⑲ 実践技術・技能の深化	.925	.48	.576	.74		
	⑳ 自己理解の深化	2.385	*	1.148	.34		
E	総合評価	2.590	*	.353	.90		

表18 施設の違いによる評価の差 (受入側の評価で、有意差のあるもののみ)

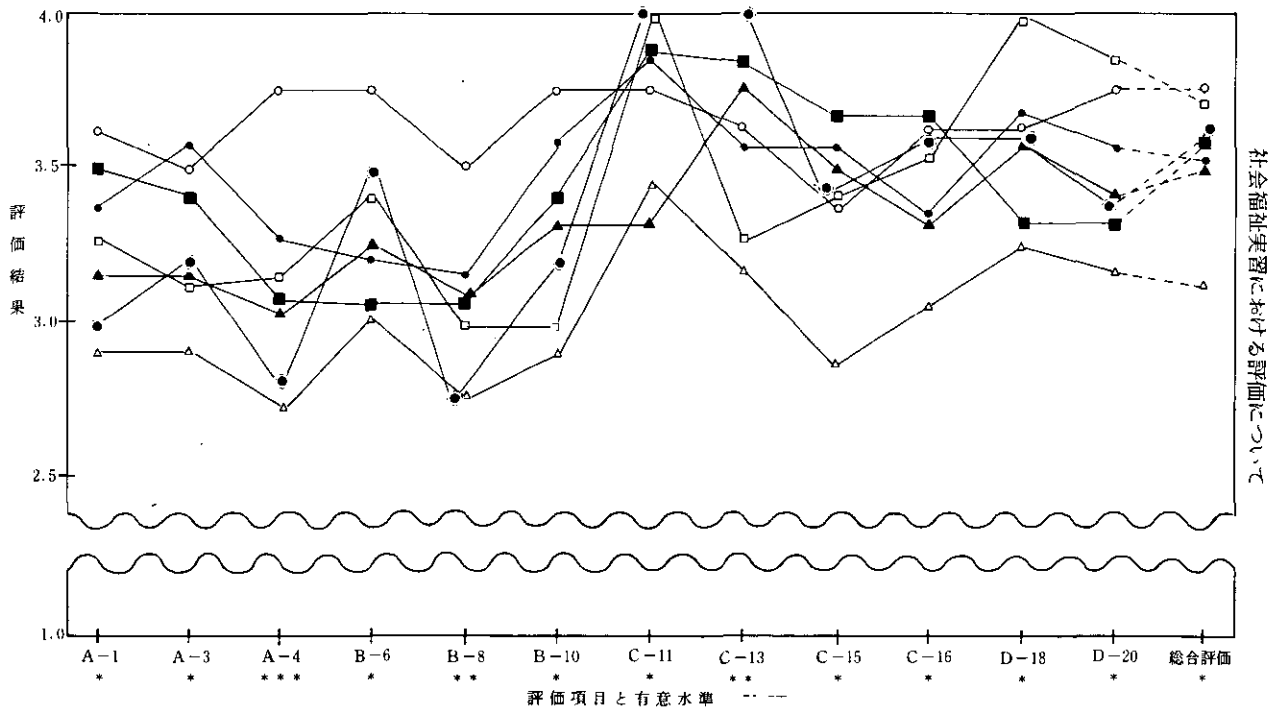
施設種類	①エード理解		③機構・機能理解		④他施設等の理解		⑥基本技術の習得		⑧社会資源の活用		⑩日誌・記録作成	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
福祉事務所・社協	3.625	.518	3.500	.535	3.750	.463	3.750	.463	3.500	.535	3.750	.463
相談機関	3.393	.626	3.571	.475	3.286	.469	3.214	.378	3.143	.363	3.571	.616
児童福祉施設	2.917	.354	2.917	.429	2.750	.429	3.028	.499	2.765	.437	2.917	.691
心身障害児施設	3.167	.389	3.167	.389	3.042	.144	3.250	.452	3.091	.302	3.333	.651
心身障害者施設	3.286	.488	3.143	.378	3.143	.378	3.429	.535	3.000	.0	3.000	.817
老人福祉施設	3.500	.522	3.417	.669	3.083	.515	3.083	.515	3.083	.515	3.417	.669
病院	3.000	.707	3.200	.837	2.800	.447	3.500	.577	2.750	.500	3.200	.837
全体	3.250	.539	3.257	.551	3.092	.501	3.247	.509	3.041	.455	3.296	.703
F検定結果 有為水準	F 3.055 S I G.0104 *		F 2.799 S I G.0170 *		F 6.150 S I G.000 ***		F 2.719 S I G.0199 *		F 3.419 S I G.0053 **		F 2.287 S I G.0452 *	

施設種類	①規則の遵守		③クライアント		⑤指導助言		⑥他職種と協働		⑧現場理解の深化		⑩自己理解の深化		総合評価	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
福祉事務所・社協	3.750	.707	3.625	.518	3.375	.744	3.625	.518	3.625	.518	3.750	.463	3.750	.463
相談機関	3.857	.306	3.571	.475	3.571	.475	3.357	.457	3.643	.457	3.571	.475	3.536	.458
児童福祉施設	3.444	.511	3.194	.546	2.889	.698	3.083	.462	3.250	.429	3.194	.389	3.139	.335
心身障害児施設	3.333	.651	3.750	.452	3.500	.522	3.333	.492	3.583	.515	3.417	.515	3.500	.522
心身障害者施設	4.000	.0	3.286	.951	3.429	.787	3.571	.535	4.000	.0	3.857	.378	3.714	.488
老人福祉施設	3.750	.452	3.833	.389	3.667	.492	3.667	.492	3.333	.492	3.333	.651	3.583	.515
病院	4.000	.0	4.000	.0	3.400	.548	3.600	.548	3.600	.548	3.400	.548	3.600	.548
全体	3.671	.520	3.559	.571	3.368	.650	3.401	.517	3.520	.493	3.454	.518	3.487	.490
F検定結果 有為水準	F 3.005 S I G.0114 *		F 3.151 S I G.0087 *		F 2.699 S I G.0206 *		F 2.479 S I G.0314 *		F 2.953 S I G.0126 *		F 2.385 S I G.0375 *		F 2.590 S I G.0254 *	

図1. 施設・機関の種類による評価の差 (受入側)

注) 施設分野について

- 福祉事務所・社協
- 心身障害児施設
- ▲-▲ 病院
- 相談機関
- 心身障害者施設
-
- △-△ 児童福祉施設
- 老人ホーム
-



⑬「他職種や他職員と協働しようとする態度」においては、児童福祉施設の評価が特に低く、他の分野ではほとんどが差がない。一方、④「関連する他施設・制度・社会資源の理解」や⑤「実習施設・機関の基本技術の習得」では、他分野と比べて福祉事務所の評価が高いという特徴がある。その他、③「実習施設・機関の機構・機能の理解」においては相談機関の評価がやや高く、⑱「実践現場理解の深化」や⑳「自己理解の深化」では心身障害者施設の評価がやや高い。

このように、学生の評価が一定で受入側の評価にばらつきがあることは、学生の実践水準というよりも、評価する職員側の期待水準や各分野の実習内容にばらつきがあることを示唆している。

表19 分野による評価の差(表18の結果と最大値、最小値を除いた結果との比較)

評価尺度項目		全 体	最 大 値 外	最 小 値 外	最大値、最小値除外	備 考
A 基本的知識理解	① クライアント・課題・ニーズの理解	.0104*	.0295* 福祉事務所	.2611 児童施設	.3798	児童福祉施設低い
	③ 実習施設・機関の機構・機能の理解	.0170*	.0919△ 相談機関	.3296 児童施設	.5758	児童福祉施設低い 相談機関高い
	④ 関連する他施設・制度・社会資源の理解	.000***	.0145* 福祉事務所	.0023** 児童施設	.2344	福祉事務所高い 児童福祉施設低い
B 基本的実践技術	⑥ 実習施設・機関の基本技術の習得	.0199*	.2926 福祉事務所	.0548△ 児童施設	.4554	福祉事務所高い 児童福祉施設低い
	⑧ 援助に必要な社会資源の活用能力	.0053**	.0827△ 福祉事務所	.0048** 病院	.0719△	福祉事務所高い
	⑩ 実習日誌や記録を的確に作成する能力	.0452*	.1229 福祉事務所	.2965 児童施設	.4710	福祉事務所高い 児童相談所低い
C 実習態度	⑪ 注意事項や規則を遵守する態度	.0114*	.0191* 病院	.0334* 心身障害者	.0465*	
	⑬ クライアントに積極的に関わろうとする態度	.0087**	.0215* 病院	.1868 児童施設	.2812	児童福祉施設低い 病院高い
	⑮ 職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度	.0206*	.0480* 老人ホーム	.8748 児童施設	.9468	児童福祉施設低い
D 変容	⑱ 実践現場の理解の深化	.0126*	.1501 心身障害者	.1222 児童施設	.5546	心身障害者施設高い 児童福祉施設低い
	⑳ 自己理解の深化	.0375*	.1354 心身障害者	.2484 児童施設	.4722	心身障害者施設高い 児童福祉施設低い
E	総合評価	.0254*	.0380* 福祉事務所	.8688 児童施設	.9218	児童福祉施設低い

注) 表中の数字はF検定結果の有意水準を示す。

社会福祉実習における評価について

(3) 評価三側面のパターンによる分野別の分析

2) -(2)において、評価三側面の組み合わせにより全体を7パターンに分類し分析を試みたが、ここでも同様の手続きを行い、分野ごとの評価パターンについての比較検討を試みた。その際「水平型」「低技術型」「高態度型」の3パターン以外はそれぞれ少数であったため、「その他」としてまとめ、主に3パターンの分野別人数・割合についての分析を行う。表20、表21は受入側、学生側それぞれの評価パターンである。各受入先分野の種類が多く総数が少ないため統計的手法をとらず、人数・割合による比較を行っている。

表20 実習先の種類別にみた評価三側面のパターン (受入側) ()内%

パターン	施設種類 福祉事務所・社協	相談機関	児童福祉 施設	心身障害 児施設	心身障害 者施設	老人ホーム	病院	合計
水平	5(62.5)	2(16.7)	5(29.4)	4(36.4)	1(14.3)	3(25.0)	—	20(28.2)
低技術	1(12.5)	4(33.3)	5(29.4)	1(9.1)	2(28.6)	2(16.7)	2(50.0)	17(23.9)
高態度	1(12.5)	5(41.7)	5(29.4)	3(27.3)	1(14.3)	5(41.7)	1(25.0)	21(29.6)
その他	1(12.5)	1(8.3)	2(11.8)	3(27.3)	3(42.9)	2(16.7)	1(25.0)	13(18.3)
合計	8	12	17	11	7	12	4	71

注)評価パターン作成時に、三側面について未解答がある場合にパターンから除いたため、総数は76より少ない。

表21 実習先の種類別にみた評価三側面のパターン (学生側) ()内%

パターン	施設種類 福祉事務所・社協	相談機関	児童福祉 施設	心身障害 児施設	心身障害 者施設	老人ホーム	病院	合計
水平	1(14.3)	—	1(6.7)	—	2(28.6)	3(25.0)	1(33.3)	8(12.3)
低技術	5(71.4)	7(58.3)	5(33.3)	4(44.4)	4(57.1)	5(41.7)	2(66.7)	32(49.2)
高態度	1(14.3)	3(25.0)	5(33.3)	3(33.3)	1(14.3)	4(33.3)	—	17(26.2)
その他	—	2(16.7)	4(26.7)	2(22.2)	—	—	—	8(12.3)
合計	7	12	15	9	7	12	3	65

注)総数が76より少ないのは、表20と同じ理由。

まず受入側では「水平型」に福祉事務所の割合が大きく、「低技術型」には病院と相談機関、「高態度型」にも「相談機関」そして「老人ホーム」の割合が大きいという傾向がある。学生の自己評価では「低技術型」に福祉事務所と病院の割合が大きく、「高態度型」には児童福祉施設、心身障害児施設、老人ホームなどの入所施設の割合が大きいというように、分野による評価の差が認められた。受入側と学生側の評価パターン

を比較すると、福祉事務所について受入側は「水平型」、学生側は「低技術型」の評価をしている。相談機関についても受入側は「高態度型」、学生側は「低技術型」が多く、分野ごとに学生と受入側で評価パターンが異なることも確認された。

4. 結 論

以上の分析から次の7点のことが結果として得られた。

1. 項目によって評価の高低に差があり、実習の目標達成状況に偏りが認められる。実習評価の三側面で見ると「実習態度」の側面は評価が高いが「基本的実践技術・技能の習得」と「基本的知識の理解」の側面は相対的に低い。
2. 受入側と学生側では実習評価に差があり、学生の自己評価が全体的に低い。しかしその低さは一定でなく、評価項目によってばらつきがある。規則の遵守やクライアントとの関わり等の評価の差は小さく、社会資源活用や援助計画立案等は差が大きい。
3. 「総合評価」と相関の高い評価項目が、受入側と学生側で相違がある。受入側は職員との協働・指導関係や自己理解の深化との相関が高いが、学生側は実践技術の習得との相関が高く、両者の「総合評価」の判定基準にずれがあることが予想される。
4. 評価三側面のパターンを比較すると、いくつかのパターンに集約される。受入側は「水平パターン」と「高態度パターン」が多く、学生側は「低技術パターン」の割合が大きい。
5. 各施設分野における高評価の項目を比較すると、相談機関と入所型施設では違いがある。実践技術の習得はどの分野も低評価である。
6. 分野による評価の差は、受入側は半数以上の項目で認められるが、学生側の評価には全く差がない。児童福祉施設はほとんどの項目において低評価だが、福祉事務所は比較的高く、施設分野によって評価基準の違いが認められる。
7. 評価三側面のパターンは施設分野によっても、さらに同分野でも受入側と学生側で相違がある。

以上が実習評価の実態を様々な角度から分析してきた結果だが、受入側、学生側の双方とも「実習態度」の側面は高く、「実践技術・技能の習得」の側面は低いという傾向が共通に認められる。はじめに述べたように、各評価尺度項目は大学側が期待する実習の達成目標であり、このように評価結果に偏りがあることは、実習教育の成果を測定する意味では問題である。さらに受入側と学生側の比較から、どの分析においても学生の「実践技術・技能への評価」が他よりも低く表れていることも見過ごせない問題である。この結果を同大学で1988年に実施した「実習施設に対する評価」⁽⁸⁾の調査と比較すると、同様の傾向が認められる。実習学生にとって目標達成感が高く、就職意欲が上昇するのは、「技術教育」中心の実習指導を受けた場合であるとの結果がこの調査から得られている。

これに対して受入側は「実習態度」の評価が高く、「総合評価」との相関を見ると職員との関わりなど実習生としての態度の側面を重視していることから、学生の評価と差が生じていると解釈できる。

そこで両評価において「実践技術・技能の習得」への評価が低い原因について検討すると、次のような問題点が考えられる。

- 実習の4週間のプログラム内で「技術」を伝達するのは難しい。
- 受入施設・機関の「基本技術」が何であるかが、学生に明瞭に伝わっていない。
- 実践技術の習得のためには、具体的援助場面の設定が必要だが、実習プログラムの中にそういう場面を組み込むのが難しい。
- 受入側の実践内容が経験や勘を重視しているため、学生に伝達するような言語化、意識化が十分になされていない。
- 学生側の問題として「技術」を学ぶまでの学習準備が十分になされていない。

実習教育が実践家養成の色彩を強めている今日、実践能力の習得が重要な課題となっている。社会福祉実習における固有の評価項目を検討するには、社会福祉従事者に固有の専門的能力を明確にする必要がある、との見解もある(山田, 1989)⁽⁹⁾。したがって今後の課題としては、実習の達成目標に照らして、各分野における実践能力 (competence) はどう

いう内容かを検討し、それを4週間のプログラムの中でどう組み立てるのかという具体的展開を、実習受入側と協働で検討していく作業が重要と思われる。

なお、本研究報告は日本社会福祉学会第38回大会において報告したものの(米本ら1990)を、その後の検討結果を加えて一部加筆修整したものである。⁽¹¹⁾

〈注〉

- * 1) 日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会・施設協議会連絡会の主催により、ブロック研究協議会での討議内容を報告、検討するもの。
- * 2) 「社会福祉実習の評価」を問題にした論文は少ない。
山田 等：「社会福祉実習にかんする一考察」 沖繩国際大学文学部紀要Vol.16, No.1 1989年がある
- * 3) 「社会福祉実習のあり方に関する研究会」1990年度3月の報告より
原田信一・市瀬幸平・橋本泰子：『社会福祉実習』相川書房1981 P153-156に共同の評価方法について詳しく述べられている
- * 4) 実習終了後の学生に対するスーパービジョンの中で、この「自己理解」が学生にはいわゆる「自己覚知」の意味で適切に受け止められていないことが判明している。

〈参考文献〉

- (1) 日本社会事業学校連盟, 全国社会福祉協議会：『社会福祉施設等[現場実習] 指導マニュアル』 1989
- (2) 統 有恒：『教育評価』教育学叢書21 第一法規出版 1969
- (3) 岡本民夫, 久恒マサ子, 奥田いさよ編：『介護福祉実習』川島書店 1990 P73-77
- (4) 前掲(1)：P81-87 現場実習後の「評価」方法として、2側面があげられている
- (5) 石井哲夫・吉沢英子：『施設における実習教育』-施設処遇実践の向上をめざして-社会福祉施設実践講座4 東京書籍 1986 P108-129
- (6) 同上：P109-110

社会福祉実習における評価について

- (7) 大島 侑：『社会福祉実習教育論』 海声社 1985 P270-271
- (8) 米本秀仁・安井愛美：社会福祉実習に関する実習学生の評価について－実習施設に対する評価および就職意欲への影響の視点から－北星学園大学文学部論集第27号 1989
- (9) 山田 等：「社会福祉実習にかんする一考察」沖縄国際大学文学部紀要Vol.16, No.1 1989年 P21-35
- (10) William Bourke: Social Work Practice Competency Elements, Faculty of Social Work, University of Toronto, 1984
トロント大学では「実践能力」をもとに実習教育プログラムを展開しており、先進的な取組として日本でも紹介されている
- (11) 米本秀仁・池田雅子：社会福祉実習における評価について
－「実習受入先の評価」と「学生の自己評価」の比較分析を通して－日本社会福祉学会第38回大会要旨集P416-417 1990及び当日報告資料

社会福祉実習評価表

北星学園大学 学籍番号 _____ 氏名 _____ (男・女)

A. 基本的知識の理解・習得の状況

	大変よい	よい	普通	あまりよい	あまりない
① 施設・機関のクライアント及びその課題・ニーズに関する理解	4	3	2	1	0
② 実習した職種の業務内容に関する理解	4	3	2	1	0
③ 実習施設・機関の法的根拠・目的・組織・業務体系等の機構・機能に関する理解	4	3	2	1	0
④ 実習施設・機関に関連する他施設・制度・社会資源等に関する理解	4	3	2	1	0

=所見=

B. 基本的実践技術・技能の習得の状況

⑤ クライエントに対して共感的・理解的に接する技能	4	3	2	1	0
⑥ 実習施設・機関の基本技術（面接 療法 観察等）の習得	4	3	2	1	0
⑦ 行事や援助計画（模範的なものを含む）の企画・立案・実行の能力	4	3	2	1	0
⑧ 援助に必要な社会資源を活用する能力	4	3	2	1	0
⑨ 場面や相手ごとにふさわしい対人関係を形成する能力	4	3	2	1	0
⑩ 実習日誌や各種記録を的確に作成する能力	4	3	2	1	0

=所見=

C. 実習態度の状況

	大変よい	よい	普通	あまりよい	あまりない
⑪ 実習施設・機関の出退勤時間や注意事項等の規則の遵守	4	3	2	1	0
⑫ 実習職種の職務を習得しようとする意欲・熱意	4	3	2	1	0
⑬ クライエントに積極的に関わろうとする態度	4	3	2	1	0
⑭ クライエントの人権・人格を尊重しようとする態度	4	3	2	1	0
⑮ 実習指導職員の指導・助言を積極的に求めようとする態度	4	3	2	1	0
⑯ 職場における他職種、他職員と協働しようとする態度	4	3	2	1	0

=所見=

D. 実習による習得

⑰ クライエントとそのニーズに関する理解を深めた	4	3	2	1	0
⑱ 実践現場に関する理解を深めた	4	3	2	1	0
⑲ 実践技術・技能を深めた	4	3	2	1	0
⑳ 自己理解を深めた	4	3	2	1	0

=所見=

E. 総合評価

	4	3	2	1	0
--	---	---	---	---	---